

があり、また戦没者の皆々様が、私達の身代わりになられたことを忘れることはできない。

(合 掌)

散った桜に 散る桜

残る桜も 散る桜

追 憶

愛知県 村 田 治 夫

八十年を遡って話すことは種々ありましたが、苦しかったことは忘れ易く、楽しかったことは頭に残っています。

愛知県津島にて生を受け、祖父母、両親の下に(兄弟) 男六人女三人の十三人家族で、私は次男でした。祖先是岐阜県養老の出身で、祖母は九十歳で他界致しましたが、この祖母に父は背負われて津島に出て来たそうです。当時は私の家族のごとく各家庭は大家族で、子供は五人、六人は普

通でした。が、生活は苦しくとも和氣藹々の日々で、朝な夕な笑い声の絶えることなく実に頬笑ましい風景でした。現代のような核家族社会が何故できたのか、自由主義が利己主義と化せしめたためだろうかと老人は考える。

父は当時、毛織物で全国的にその名を覇せていた尾張の西地区(尾西地区)の当時日本では屈指の羊毛織物会社「片岡毛織」に入社して実直に働き、後には非常勤重役の席にも座しました。親父の真面目に働いた賜物で、昭和初期の大恐慌時も、贅沢では無いが、まあ豊かな生活ができました。

父が学校は上級校に進めと申されましたが兄弟の多い大家族です、普通の高等科に進みました。卒業と同時に父の在籍していた片岡毛織に入社して一年間無事に働きましたが勉学の志やみがたく、友人の推薦で日本車輛の労務課の上司に願ひ、昭和十四(一九三九)年春入社、正社員として働きました。夜間は、県立旧制工業中学校に通

学しました。勿論下宿生活で深夜まで机に向かって頑張っておりまして。

時、昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発しました。自分も明後年は徴兵検査だ。頑健な身体故に軍人になるは必定、ならば一年でも「先手を打って」特別志願してやろう、と役所の兵時課に申請しました。

先輩達に陸軍と海軍の話をお聴きました。結果自分は海軍を希望して受験しました。昭和十六年晩夏だった、現役の連中と特別志願者同一会場で検査が行われました。見事甲種合格でした。翌年一月大竹海兵団への入団通知書が届きました。早速会社では壮行会をして頂き、津島の自宅では親戚や友人達に激励会で見送られ、名古屋駅前で「万歳！ 万歳！」の声援で送り出されました。

大竹海兵団では、東海・近畿・中四国から、それぞれ優秀な軍人の卵が相集いました。一瞬「これは大変だ、頑張るぞ」と心に誓いました。入団

翌日から陸上訓練（陸戦隊の基礎）、カッター（短艇漕ぎ）、手旗信号（モールス）など種々の学科があり、一分隊三十人に教官、教育係がおり充分「海軍軍人精神」も叩き込まれました。同年八月に次の命令にて退団できました。

瀬戸内海要塞地帯にある大須山砲台に勤務しました。当所の勤務は古年次兵隊の世話をするくらいで、取り立てて申し上げることもなく、毎日のんびり海路を往来する船舶を眺めておりました。分隊士（人事係特務曹長）から「村田。館山砲術学校へ行け」と命ぜられまして昭和十八年五月同校に入隊しました。約三カ月（一二・七センチ高角砲）について徹底的に勉強しました。同年八月卒業しまして呉の海軍兵学校第一分隊に所属しました。

一個分隊は陸軍の一個中隊です。私も入団以来一年半余りを経過しました。少し分別も付き種々勉強しました。初年兵の教育助手なども致しまし

た。昭和十九年六月、海軍第三十一特別根拠地隊に勤務することとなりました。海軍艦艇が不足し民間の御用船を改装して砲座を造り、急造の護衛艦でした。勿論爆雷や機関砲は充分装備し、対航空機と潜水艦対策は充分に行いました。門司・博多・下関等から陸軍部隊をマニラに輸送しました。

同年七月だった。その船舶数二十三隻、歌の文句にある「ああ堂々の輸送船……」のような見事な大船団でした。この船団の一部は台湾の基隆に、主力はマニラに護送しました。自分の艦は「ラクトウ丸」でした。一度高雄を出港した陸軍部隊満載の御用輸送船が敵潜水艦の魚雷にて沈没しました。救急救助すべくすぐ海に行きました。陸軍兵は全員禪一本の裸で第一船倉や甲板に鈴なりに乗船していました。沈没時に、オイルに依る火焼で死亡された人が多かった。高雄の病院に運んだが助かった人は少なかったと思う。ここは敵

潜の好餌の海域で、日本軍としては「魔のバシー海峡」と呼称しており、自分たちの輸送護衛船としても最も恐れた海でした。このような輸送護衛の任務を数回行いました。最終にはマニラに上陸しました（陸戦隊要員だったと思う）。

約一カ月程過ぎた頃、フィリピンは第十四方面軍で山下奉文大将の隷下にあり、海軍関係では、大川内中将の南西方面艦隊司令部、岩淵少将の第三十一特別根拠地隊（自分の所属部隊）がありました。約一カ月程過ぎた頃に小隊はルソン島最北端の港町アバリへ行けとのことだった。数隻の機帆船に分乗して東シナ海側を北進しました。

ちなみに当時、ルソン島は持久作戦を取るためにマニラ東方山岳地帯（マニラの水源地）に振武集団があり横山中将の下に約八万余人の軍団。また西方山岳地帯（含バタン半島）に建武集団があり塚田中将の下に約四万余人が布陣しました。中央以北即ち山下大将直轄軍団尚武集団があり、十

五万二千余人が布陣しました。

標高一五〇〇メートルのバギオ（古都で避暑地）から以東、太平洋岸までをカバリヨ山脈と呼び、北部ルソン島の大河カガヤン河の源流である。五号国道がこの山波を縫ってアバリに通じていたため、この港湾施設や飛行場は絶対確保せぬと、生命線だといわれました。またこのカガヤン河流域は、土壌豊かで農作物の宝庫でした。

十月頃に台湾沖海空戦のあった頃にアバリ飛行場にも敵の戦爆両用機が幾編隊も来襲しました。

日本軍は虎の子の飛行機がアツという間に叩かれました。敵は航空母艦を主力とした一大機動部隊でした。日本の空軍はこの時点で青息吐息の状態でした。敵襲の時に高角砲三門が焼け付く程発射しましたが一発も命中せずでした。作戦を立てて敵の最先頭の一番機（指揮官機）に目標定めて、三門の高角砲を同時発射しました。見事命中し黒煙を吹きながら爆発墜落しました。思わず「万歳！ やった」と叫んだが翌日が大変でした。空

が黒くなるほど敵機が来襲し、雨霰と爆弾を投下しました。アバリ空港は蜂の巣のごとく滑走路全面が凸凹の穴ぼこ化しました。

昭和十九年十二月二十日頃の大空襲では港湾施設は完全に爆破炎上しました。三日間ほど炎が上がつていました。尚このルソン北部地帯は駿兵団の第百三師団が配備され、敵の上陸および落下傘降下部隊に備えて守備していました。十二月二十三日、鉄兵団が「江の島丸」にてアバリ港に入らんとしましたが、港の施設破壊炎上中で東方六〇キロの小さな漁港（カサブランカ）に揚陸しました。岡山の歩兵第十連隊の精鋭でした。同船も早急に台湾高雄に引き返せとの暁船舶司令部の命令で、揚陸物資を半分残して台湾に返って行きました。

昭和二十年元旦、炊事係の努力で餅を喰い、北方に向かって「皇居遙拝」をしました。またマニ

ラにあつた海軍の戦友達、海軍防衛隊、海上北進基地隊は共に華々しく戦つたと戦後耳にしました。海軍魂でベニヤボートで夜陰に紛れて敵の機動部隊に突入した隊もあつたとのことでした。自分達の小隊は暁部隊の船舶工兵隊の佐藤少佐の指揮下に入りました。

バトリナオという小さな山間の部落へ撤退（退却）しました。食料は充分温存し、医薬品とくに熱帯マラリアの特効薬「キニーネ」は各人百粒入りの小壺を携行しました。これは極秘でした。陸軍は食料は勿論医薬品等も皆無に等しくて「キニーネ」の所持者を発見したら銃殺されるぞと、戦友間で話をしていました。

戦友諸兄の話に依ると、昭和十七・十八・十九年ころ大東亜海域の港湾には暁船舶関係軍団が必ず駐留して、兵站基地の任務を完うしていたとの事でした。陸軍部隊も死に物狂いだつたと思われ。また近年、(社)軍短協会発行の『戦友会調査』資料を見せて頂き、往時の戦場における全軍

の活動が掌を指すごとく理解できました。

他はさて置き、自分たちの働いた海域及び比島戦線に戦い散つて行つた人々のことに想いを走らす昨今です。

第一師団（玉兵团）東京編成・レイテ戦線にて
玉砕。

第八師団（杉兵团）弘前編成・ルソン島・一部
レイテ島激戦。玉砕戦闘。

第十師団（鉄兵团）姫路編成・ルソン島・バレー
峠にて百日攻防戦にて、玉砕戦闘。

第十九師団（虎兵团）朝鮮羅南・北部ルソン島
に玉砕戦闘。

第二十三師団（旭兵团）熊本編成・ルソン島に
散華、岩仲戦車旅団はリングアエンにて米軍戦
車との死闘。

第二十六師団（泉兵团）華北からルソン・レイ
テで死闘。

第三十師団（豹兵团）平壤（ピョンヤン）編

成・ミンダナオ・レイテにて死闘。

第四十七師団（弾兵団）ルソン島防衛戦。

第二百師団（抜兵団）レイテ・セブ島に死闘。

第三百師団（駿兵団）ルソン島・カガヤン峡谷にて死闘展開。

第五百師団（勤兵団）比島ルソンにて激闘。

戦車第二師団（撃兵団）リンガエン平野にて米軍戦車軍団と死闘、以後サラクサク峠にて歩兵部隊に改編激闘。

その他たくさん、旅団・独立連隊・部隊があり、自分達海軍にしましても、数多くの陸戦軍団が、各々港湾をはじめ地上部隊として随所で活躍しました。

前述の鉄兵団、虎兵団、旭兵団、撃戦車兵団等々は昭和十九年末に自分達の僚船が、それぞれ比島の港湾に移送しました。自分は北部ルソンの山中で暁部隊、佐藤少佐の指揮下に入りました。ゴンザガに転進命令があり二十五ミリ機関砲は自

分の責任において携行しました。弾薬箱は重量があり移動は大変でした。カラバオ（水牛）に橇を引かせて輸送に利用しました。

陸軍は食料も医薬も無く栄養失調とマラリアとで、熱発餓死者が多く出て、移動の途中で行路病者のごとく倒れ、数日で白骨化して白骨街道というような惨状を目撃しました。生きていても寝ている時に目や鼻や口元に蠅が来ていたらもう終わりです。残念ながら臨終間近だ。可哀想だが、手の施しようが無かった。無慈悲のようだがこれが戦争なのだ」と割り切る以外処置なしでした。

自分としては敵との交戦は対飛行機だけでしたので戦場その他における罪悪感も無く、華々しい戦果もまた戦禍もなしでした。

昭和二十年九月中旬、米軍特使による停戦の通告があり「ホッと一息付きました」とこれが偽らざる心境でした。正式の終戦命令が発令され陣地を後に下山しました。米兵がニコニコと笑顔で迎

えてくれるのが不思議なようでした。ただ命より大切に扱った「天皇陛下」から与えられし銃火器は米軍に子供の玩具のごとく取り扱われ足蹴りにされた時は、腹が立ち顔色が変わったと思いません。

最初の収容所は名称を忘れましたが、三カ月程してマルキナ収容所に入れられ、毎日のんびりと遊んでいました。米軍宿舎の軽作業等に何人かずつ出て行くぐらいでした。全員健康になり、体力を発散させる方法ということで相撲を取ろうと土俵を作り、各隊の力自慢が集まって「発揮！揚々」と毎日やっていました。

自分の四股名は「健康山」で土俵に上がって投げたり倒されたり楽しく毎日を過ごしていました。後日判明したことです。マッカーサーは昭和二十年七月初旬に比島戦線は終結したと発表され、以後は米軍からの攻撃はなかったとのことでした。

停戦までの二カ月間にいかに多くの軍人が生命

を落したかと思う時、残念で致し方ありません。自分は無事に帰って来ましたが「水漬く屍、草むす屍」と化せし同胞戦友を偲ぶ時、未来永劫戦争の無きことを願いつつ今八十余年の人生を静かに振り返っています。